

## 【曲目解説】

ブラームスは、時期を接して、相反する性格の同じジャンルの曲を書くことが多くありました。今回演奏する「悲劇的序曲」と「大学祝典序曲」の場合もそうです。ブラームスは大学生活を送ったことはありませんが、その作曲家としての優れた業績に対して、1879年3月に、ブレスラウの大学から名誉博士の称号を贈りたいとの申し出があり、それを喜んで受理することにしました。そして、その謝意を音楽で表すこととし、「大学祝典序曲」が書かれました。この曲の作曲は、1880年の夏、オーストリアの避暑地イシュルで行われましたが、その直後に「悲劇的序曲」の作曲に取りかかったと言われています。1880年9月6日出版者ジムロックに宛てた手紙には「この非常に楽しい“大学祝典序曲”の後に、(性格の異なる)“悲劇的序曲”を書かないでいらなかった。」と記されています。「悲劇的序曲」は、二つの主題を持つソナタ形式に従っていますが、情緒・雰囲気の流れや展開には幻想曲風の味わいもあります。曲は、いきなり二つの和音で開始され、この二つの和音が全曲を支配し、悲劇を感じさせながらも、力強い情熱を秘めた作品に仕上がっています。

モーツァルトがフルートという楽器を好んでいなかったという話は有名ですが、特に後期のピアノ協奏曲におけるフルートの扱いは卓越しており、さすがに楽器の特徴をよくつかみ、発揮させていると思われれます。そのモーツァルトは、フルートとハープのためのものを除くと2曲のフルート協奏曲を作曲しています。第1番と言われるト長調のものと今夜演奏する第2番ニ長調のものです。ト長調の協奏曲もなかなか魅力的な作品ではありますが、ニ長調の方が圧倒的に有名です。事実ニ長調の協奏曲は、爽快に流れるように次々と現れる楽想、遊び心と温かみを感じさせる展開など、一度聞いたら忘れられないものでしょう。ところが、この協奏曲は、もともとフルートのために作曲されたものではなく、彼自身のオーボエ協奏曲ハ長調の編曲なのです。それが、本来フルートのために作曲されたト長調の作品や、原曲のオーボエ協奏曲よりもよく知られ、演奏されるようになってきているのは面白いことです。(もっとも多く多くのオーボエ奏者にとっては、ちょっと面白いことではないでしょうが) さて、モーツァルトが自作のオーボエ協奏曲をフルート用に編曲した経緯ですが、1777年12月11日、マンハイムで、当時ヨーロッパに知れ渡っていて、親交のあったフルート奏者のウェントリングを通じて、ド・ジャンというオランダ人に紹介されます。彼は、モーツァルトを尊敬し、3曲のフルート協奏曲と2曲のフルート四重奏曲の作曲を依頼し、高額の作曲料を提示します。当時経済的に豊かでなかったモーツァルトは早速作曲に取りかかりますが、フルート嫌いの彼のこと、作曲が思うにまかせなかったのでしょうか、結局2曲の協奏曲と3曲の四重奏曲をド・ジャンに手渡しますが、そのうちの1曲の協奏曲は何と編曲で済ませてしまったというわけです。

ベートーフェンの「英雄交響曲」の冒頭、2回の和音が、音楽におけるロマン主義の扉を開けたといっても過言ではないと思われれます。展開の綿密さ、多彩な和声進行にのせて、ドラマやストーリーを感じさせる音楽になっています。1802年10月頃から着想されていたらしいこの「英雄交響曲」は、当時32歳のベートーフェンの、新しい音楽を作ろうとする、漲るような意欲に貫かれた傑作です。50分にもわたるこの曲には、それまでの彼の作品からの超人的な飛躍が見られます。この偉大な作品は当初ナポレオンに捧げられる予定でありましたが、彼が皇帝に即位したのを知り、新しい時代を築く改革者としてナポレオンを尊敬していたベートーフェンは、単なる野心家としての俗物性に怒り、「誰よりも暴君となり、すべての人権を足元に踏みこむだろう。」と言って、「献呈」の文字を激しく塗りつぶしたという逸話も又有名であります。